

大友時代を
生きた人々



鹿毛 敏夫

足利義政（1436～90年）は、室町幕府の第8代将軍です。14歳から39歳までの25年間にわたって将軍職にあり続けた義政は、文明5（73）年にその地位を子の義尚に譲つてからも、将軍後見として実権を握り続けました。

しかしながら、義政期の室町幕府は、応仁元（67）年に勃発した応仁の乱以降すでに衰退期に入り、京都の政治は混乱するとともに、將軍家と幕府は経済的にも困窮する状態に陥っていました。

その義政が、文明8（76）年9月29日に、豊後国の守護大名「大友豊前守」こと大友政親に宛てた御内書（將軍家が發給した文書）が、「大友家文書録」の中に残されています。

「父家督與尊祝儀として、太刀一腰・鷹眼式万疋到来候おわんぬ、悦喜候、よつて太刀一振・國俊・腹巻一領・浅黄糸・馬一疋これを遣わし候なり」

14世紀後半から15世紀後半にかけての大友家では、9代氏継とその弟の10代親世以降、それぞれの系統から交互に家督継承者を出す「兩統迭立期」が続き、一

足利義政 幕府の財政難、献金でしのぐ

族の關係は不安定な状況で推移していました。

史料冒頭の「父家督與尊祝儀」とは、氏継系出身の父親繁が持つ家督を、慣例に従つて親世系に譲り与えることなく、子の政親が無事に継承できた事態を示しています。親繁・政親父子にとつてこの家督引き継ぎの成功は、過去100年続いた兩統迭立を終焉させたこの上ない「祝儀」だったことが分かります。

親繁・政親父子は、文明8年4月の家督継承後すぐ、新当主政親の名義で祝儀の品を携えた使者を京都に派遣したので、この時に、前將軍足利義政が手にしたのは、「太刀一腰」と「鷹眼式万疋」（銭200貫）

文120万枚）。莫大な量の進物だったことが分かります。気を良くした義政は、国俊作の太刀・浅黄糸で威した腹巻（鎧）・馬の3品を答礼として贈っています。

「大友家文書録」によると、この時の贈答品に対する幕府側からの返書礼状が17通届いていて、家督祝儀進物を受け取ったのは、義政の他、足利義尚・足利義親・伊勢貞宗・斯波義良・畠山政長・細川政国・赤松政則・小笠原政清ら、室町幕府中枢の面々だったことが分かります。その進物総量は、「太刀」11本と、「鷹眼」6万1000疋（銭610貫文161万枚）に上ります。

財政難だった足利將軍家と室町幕府は、このような地域守護大名からの銭の「献金」によつて、かううじて政權運営できていた実態が分かります。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）

11月1回掲載

為父家督與尊祝儀太刀一腰鷹眼貳萬疋到来候
訖悦喜候仍太刀一振 國俊 腹巻一領 浅黄糸 馬一
疋遣之候也

九月廿九日 御判

大友豊前守とのへ

大友政親からの銭20万枚の献金を謝した「足利義政御内書」（「大友家文書録」から）